

【講評文】8月10日（水） 9校目

「籠の鳥～初月麗子の事件帖～」 関有知高校

ミステリーを高校演劇として舞台上で行うにあたって、多くの場所や部屋を演出しようとしたり証拠を観客に見せようとしたりすることが難しいなど様々な課題があったと思います。しかし、舞台上を1つの部屋としてのみ使い、巧みな脚本と演出がキャストの動作と発言だけで別荘の間取りを観客が想像しやすくし、無理のないワンシーン設定を可能としました。まるで本物のミステリードラマを観ているような感覚になるほどです。

最初の自己紹介のシーンがあることによって、登場人物全員のキャラクターがよくわかりました。登場人物によって名前の呼び方が違うため関係性はよく分かるのですが、序盤でまだ人物像が定着する前だと、誰が誰なのか分からなくなってしまうという難点もありましたが、衣装が変わってもイメージカラーを意識して衣装が考えられていたため、劇中盤以降は誰が誰なのかも理解しやすくなりました。キャストはみな自然な演技が目を引き、やや聞こえづらい台詞はあったものの、リアリティを迫った姿勢が強く感じられるよい芝居でした。

また、音響や照明がシーンによって効果的に使われていて、雷雨のシーンで照明をフラッシュさせたり、それに合わせて雷のSEを、バックでは豪雨のSEを鳴らしたりする音の重ねによって、本当に雷雨の中で外にいるように感じられました。最初の緑のLEDと最後の赤のLEDに関しても、それまで基本的に室内照明だけだった空間に異質で目立つ色が入ることで、何とも言い難い奇妙な感覚に全身が支配され、目を離せなくなりました。

装置に関して、壁パネルがペンキではなく壁紙で表現されていることによって実際の部屋が再現されていました。ソファやダイニングセットも頻繁に使われており、とてもリアリティのある日常感を感じられました。また、ドアがあったりパネルの位置をずらして影パネルとしたりすることによって、まるでその奥に2階への階段へ繋がった廊下があるように感じられ、自然と別荘の構造を意識することができて、とても楽しく空間を想像することが出来ました。

劇中の5分間のシンキングタイムや、観劇が終わった後にも観客が謎解きに参加でき、実際にミステリーを解く楽しさを体験することができる、とても斬新で画期的な公演でした。

関有知高等学校のみなさん、上演お疲れさまでした。

(文責 岐阜各務野高等学校 2年 大墨琴音)